

1662 新人歓迎 (倉戸山)

期日 四月六日(日)  
C L 出口 當

189 東村山市萩山町二丁目二五  
S L 会員昇格者  
申込み 総会まで  
備考 新入会者を迎えての初めての山行です。多くの会員の参加を望みます。

☆予告 五月合宿を次のとおり実施します。

一 会員対象 後立山白馬鍾ヶ岳周辺

約八日間

一 新人対象 奥秩父にて縦走

約三日間

集 会 計 画

☆事業部会 三月四日(火) 立川「道」  
☆委員会 三月五日(水) 国立事務所

係渡辺

☆第一集会 三月一二日(水) 小金井婦人会館

☆海外遠征 三月一九日(水) 小金井婦人会館

☆総 (山話会) 三月三〇日(日) 国立公民館

係秋元

三月三〇日は年に一度の総会です。会費値上げ等重要議題がありますので多くの方の出席をお待ちしております。尚、係より出席依頼の連絡がまいります。  
他の集会は一九時開催。

表紙のことば

冬、重荷とラッセルで、体が「く」の字にへし曲がる頃、陽光に映える白き山を垣間見るとは実に楽しい。

この燕岳もそうであった。 秋元 和視

山 行 報 告

1647 爺ヶ岳 (冬山合宿)

期日 一二月二九日(日)〜一月二日(木)

参加者 渡辺 C L 塚田 S L 菅沼 S L 鈴木孝 出口 (備) 小川 (正) 石川 小堤 甲山 島影

藤井 天野 桐田 永井 斎藤 (備)

以上一六名

目的と計画

今回の合宿は、来たるべき三〇周年記念海外山行を目標とした事業計画の第一段階として、以下のような概要で実施された。

フィックスザイルを必要とするルートより、主稜線上にキャンプを上げ、頂上攻撃を行なう。小人数パーティにより、初歩的なバリエーションルートをとリースする。併せて、冬山経験の少ない人は基礎的な雪山技術の修得。を目的として計画が立てられた。

合宿地の決定に際しては、最終的に白馬鍾ヶ岳と爺ヶ岳のそれぞれ信州側が候補に挙がったが、段

階的レベルアップ等の条件を考慮し、爺ヶ岳小冷尾根より鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳北稜登攀、白沢天狗尾根より縦走の線が計画が進められた。しかし、参加者の減少により白沢天狗尾根を割愛せざるを得なくなり、小冷尾根(本隊)、北稜で実施されることとなった。  
装備、食糧とも事前の荷揚げは行なわず、特に北稜はBCより、軽装備によるラッシュ戦術がとられることになった。

報 告

☆一三月二九日(日) 曇り 鹿島部落〜小冷尾根取り

大町駅より始発バスで鹿島部落へ入る。全員がバスに乗れなかったため、石川 L、小堤、甲山、斎藤 (備)、永井の五名が先発隊として出発。まっすぐな林道を大谷原まで歩き、そこから河原の雪原に入る。しばらく雪が降っていないので、ワッパをつけると、ほとんどもぐらさず快適なピッチで進む。問題の堰堤は、梯子がなく、左側の斜面を高巻きしてけっこり時間をかけてしまった。

高巻きのルート工作をしている間に本隊も到着し、百米ほどの間をおいてついてきた。このあたりで単独行者に道をゆずり、先行者の跡を参考にしながら、三回ほど流

れを渡りかえす。一個所渡渉するのにスリッパしやすしい場所ではイルをウィックスして本隊を渡らせる。そこからは、尾根取付点の幕営予定地に到着した。まだ時間があるので、荷上げ隊を十名ほどで編成して登り始める。比較的急な尾根で、部分的にルートのとおり方が悪く緊張させられた部分もあった。標高一七〇〇米地点に荷上げ品をデポして下る。下りには正規のルートをとったので歩きよくなって、すぐ幕営地に着いた。(永井 正敏)

タイム 鹿島7・40 大谷原8・45 50 堰堤手前9  
50 10 05 堰堤の先11 15 取付点幕営地12 30 13 30 1 デポ地15 40 16 00 取付点幕営地16 40

☆一二月三日(月) 曇り後雪 取付き一八九七一米BC  
取付から昨日のデポ地まではトレールはバッチリで、荷物も少なくどんどん進んで、すぐ着いた。

デポ地からは荷物がぐっと増える。先発隊が道を固めながら進む事にする。昨日の荷上げ隊とほぼ同じメンバーだ。我々といっしょに入ってきた大阪の単独行者が先で道を作って進んでいるため、我々は激しいラッセルをすることもなく、きわめてスムーズなペースで高度をかせいでいく。朝のうちは木の間から小冷尾根上部が見え

たが、そのうち雪が降り始め視界が悪くなる。

昼前に一九七一米ピークへ到着、すぐBC建設にかかると別れて行動にかかると。上部への荷上げ隊は、菅沼、出口(鶴)、小川(正)、小堤、甲山、藤井の六名で。ラッセルをしながら二時間登り、小冷尾根上部の壁がハッキリ見えるあたりで打切り。ここへデポする。明日の行動を考えると身のしまる思いで、一路BCへ下山へかかる。(藤井 諭)

☆一二月三日(火) 晴のち層雲により中腹以下曇り

○小冷尾根ルート工作隊 BC 1 北稜(北峯肩)

P 渡辺 小川(正)

天気は良し、頑張らにやと先行した北稜隊のトレールに従いBCを後に小冷尾根を登り出す。最低コル手前のピークよりトレールは左に、我々は尾根上を辿る。昨日の荷上げの際のトレースは消えがちでラッセルをして進む。ダケカンバの点在する穏やかな尾根をひとつ切登るとデポ地点に到着、ルート工作用装備のバックをすませ一本立てる。眼下には後発隊の進行がよく見える。

「行こうか」の声で渡辺がトップで登り出す。傾斜もガ

ゼン強くなった、本格的なラッセルで楽ではない。ダケイ体にもいわず渡辺のラッセルは立派なものである。尾根筋がボヤけたイヤらしい急斜面を登りきると気分がよい雪稜が続いている。伸びてる尾根は左に曲がりながら北稜の側面に傾斜をグット強めきえて、その上部は岩壁となっている。小冷尾根の核心部である。一とき後方にいた単独者にラッセルをしろらい、バトンタッチで我々が先行し、勾配の増した尾根筋をドンズマリまで行き、ルートの検討、決定しキスリングで行動している後続のため、フィクス・ザイル工作をすべく行動を開始した。

雪面をダケカンバの生えた岩壁の下部まで直上し支点を作り、その基部を左方へトラバースをする。岩壁基部のため雪は深く、またジェルンドもありで、もがきながらの前進、そして北稜直下、小さな雪庇の下に着く。振り落すビッケルでくずれた部分をルートに北稜に出る。五〇米程伸びたザイルはセットされ渡辺も稜に出て来た。この部分の稜の傾斜も強いので、渡辺トップで四〇米のセットを行って上に出た。ここからは傾斜も若干落ち、

小さな段を登りきると、北峯は目の上に近かった。

一本立て、ここで後続パーティーを待ちながら北アルプス暮れの展望を楽しんだ。やがて顔を出した仲間を迎え一時を過し、「ジャア頑張ってたな」の挨拶を交し、我々は往路をBCに下り出す。途中で北稜隊との交信すべく試みるが、ならずコール交換を行った。(小川 正義)

タイム BC 6 10 小冷尾根最上9 30 1 北稜上10  
14 1 北峯肩11 45 12 05 1 BC 14 20

○鹿島槍隊・サポート隊 BC 1 爺ヶ岳北峰

P 菅沼 藤井 小堤 甲山 出口 天野

六時半、ようやく明るくなった小冷尾根のベースを出発する。最低コルを過ぎたあたりから尾根はやせてきて、雪稜状となる。渡辺、小川(正)の先行パーティーのラッセルのおかげで歩きやすい。途中、昨日荷上げておいた分をプラスしてさらに進む。小冷尾根が北稜の側面に雪壁となつて消える所で先行パーティーに追いついた。ラッセルしてザイルをフィックスしているところであった。ベトスから眺めた時には、キスリングをかついで登れるルートなど、一体どこに取るのかと思っていたものだが

やや直上した所から左にトラバースして、うまくルートがとれた模様である。一休みした後、登りはじめの。雪はサラサラしており、安定はきわめて悪い。しかも急ときている。ステップごとにピッケルを深くさし込み安全をはかる。やっとの思いで北稜上に出ると、後立山主稜線の爺ヶ岳まで白い雪葎がなんともどかに、そして歩きよさそうに続いていった。フィックス終了地点で渡辺、小川と別れ、爺ヶ岳北峰まで登りそこで暮宿した。

(天野 一郎)

○本隊 B C I 取付き (荷上げ)

P 鈴木(幹) 石川 小川(鶴) 桐田 永井 斎藤

朝焼が消える頃、小冷尾根を行く鹿島隊を送る。本隊は彼らとは反対の方向へ、とりつきにデポしてきた食糧の荷上の作業を開始する。

B C ととりつきの中間地点で一本立てても、一時間ばかりでとりつきに出る。登りではそれほど気にならなかった勾配が、下りではずいぶん急斜に感じられる。上げるべきわずかの荷を六人で分ける。前日のキスリングの重さから解放された軽い荷上げである。途中ドレーズをよけてデポしてある他のパーティーのドロコを見つけ

その日付を見て、そのパーティーの食糧の心配をしてみたりという余裕もおのずと出てくる。

B C に戻ってから、ゆっくりと東尾根や高千穂平のテント群を眺めたり、また登頂を目指す二隊の行方を探すが、やがて、小冷尾根を下る小川(正)と渡辺の姿を見つける。思いの外早く登頂ができるようである。

(桐田 淳子)

タイム B C 6・35 I とりつき 7・40 I 8・10 I B C 10・30

☆一月一日(水)曇り

○鹿島槍隊・サポート隊 鹿島槍ヶ岳往復 I B C

P 鹿島槍往復 I 菅沼 藤井 小堤 甲山

サポート隊 出口 天野

少々もたついて出発する。すぐに黒部側の夏道に降りて進むと、北峰を絡み終えぬうちに冷池の方からのパーティーに出会い、早、人間臭い稜線歩きとなる。

道より下方にしばしば雷鳥を認めながら下降を続け、最低鞍部を過ぎれば、色とりどりの天幕の大群落。天候も縮まらぬ感じで、何となくお正月気分である。夏のキャンプ場あたりからは、黒部側は雪がかなり飛

ばされており、信州側に雪庇を形成している感じである。

布引への登路で少々くずれ始めた空模様の中、全くの夏道を忠実に鹿島槍南峰の頂上に立つ。握手と撮影。

往路を帰れば、わずかで再び天気は回復、剣から種池爺南峰までの眺望の中、道を急ぐ。北峰へのひと息の登りを終え、夏道から稜線上へと登る我々を、先に着いた北稜パーティーが迎えてくれた。

しばしの休息の後、この天幕を徹収、急な斜面を、気をつけて下降し始める。フィックスに至るまでも、ずいぶん急である。フィックスの部分は、サブの北稜隊に回収を頼んでキスリング組は順次ブルージックを取って、通過する。

かなり時間をかけてこの部分を経た後、北稜隊には後から来てもらうことになり、今朝本隊が残した足跡に従って、小冷尾根をベースへと急いだ。

(甲山 啓司)

タイム 爺ヶ岳北峰 6・50 I 鹿島槍南峰 8・30 I 50 I 冷池幕营地 9・30 I 50 I 爺ヶ岳北峰 10・20 I 12・00 I フィックスロープ下 13・10 I 50 I B C 15・20

その日付を見て、そのパーティーの食糧の心配をしてみたりという余裕もおのずと出てくる。

B C に戻ってから、ゆっくりと東尾根や高千穂平のテント群を眺めたり、また登頂を目指す二隊の行方を探すが、やがて、小冷尾根を下る小川(正)と渡辺の姿を見つける。思いの外早く登頂ができるようである。

(桐田 淳子)

タイム B C 6・35 I とりつき 7・40 I 8・10 I B C 10・30

☆一月一日(水)曇り

○鹿島槍隊・サポート隊 鹿島槍ヶ岳往復 I B C

P 鹿島槍往復 I 菅沼 藤井 小堤 甲山

サポート隊 出口 天野

少々もたついて出発する。すぐに黒部側の夏道に降りて進むと、北峰を絡み終えぬうちに冷池の方からのパーティーに出会い、早、人間臭い稜線歩きとなる。

道より下方にしばしば雷鳥を認めながら下降を続け、最低鞍部を過ぎれば、色とりどりの天幕の大群落。天候も縮まらぬ感じで、何となくお正月気分である。夏のキャンプ場あたりからは、黒部側は雪がかなり飛

○本隊 B C I フィックスロープ直下

P 渡辺 鈴木(幹) 小川(鶴) 桐田 永井 斎藤(團)

時々陽のさす天気の中を、B C を出発。小さな雪庇の続く小冷尾根を登っていくと、尾根はせまくなり、急登となつて、まもなくフィックスザイルの手前まで来る。

そこで雪の間に間に見える鹿島槍などをながめて、B C へもどる。

(斎藤 重幸)

タイム B C 7・00 I フィックス直下 9・05 I 9・30 I B C 10・30

○北稜隊 P 塚田 島影

☆一二月三一日(火)晴 B C I 第四岩峰直下

昨夜の雪が心配で、起きて直ぐ外を見ると満天の星空である。おれたちはついていて。今日の登攀の為に腹いっぱいおしゃをかき込む。

岩の登攀も予想してB C でアイゼンとワカンを併用する。昨夜の雪でトレールは消えている。二〇二〇米Pから昨日偵察した尾根を下る。B C から一時間で北稜の取付点に達する。

北稜の登攀は末端のルンゼから始まる。ルンゼを直上し、尾根に向って左の斜面を登ると尾根は相当大きな楕

の頂部迄雪が積り、梅の頂部で尾根が形成されているような状態だ。昨日もどこから尾根上に出来るかわからないまま偵察を打切ってしまった。予想通り最初の難所だ。左に回り込み、二ノ沢側から取付こうとしたが、やはり枝に積った不安定な雪と枝の下は空洞になっていのおそれから断念。元にもどり、二本の梅の間を両方の枝を利用して鳥影トップで見事に突破。大分時間を消費してしまった。

尾根はリッジになっており、しばらくすると第一岩壁（岩壁が大小四カ所あったが、岩峰というより岩壁の方がふさわしいと思う）が現われる。これは右からトラバースして尾根に出ようとしたが、先程と同じように梅にじゃまされ、さすがの鳥影も悪戦苦闘の末断念。この様子をながめていた塚田が腰掛けていたダケカンバにビレイを取り、更に上部迄トラバースを続ける。このトラバースは雪崩の心配があるので、アンザイレンをし、塚田トップで登る。二〇米程トラバースした所で小さな尾根を越し、この尾根を一五米程登った所で主尾根上に出られた。鳥影を確保していると小冷尾根を登っていく二人が見えた。昨夜の話の様子から、渡辺と小川がルート工

作のため先発したのだろう。コトルをかけたら答えてくれた。

この先リッジを登ると第二岩壁が現われ、二ノ沢側の斜面を一〇〇米程トラバースし、岩壁の頂部めがけて直上する。急斜面で身体をづり上げる時には顔を雪面にすりつける様な状態だ。上部でやや傾斜がゆるくなったがザイルが無いという。雪の状態からしてとてもビッケルをさし込んで確保できるような場所ではない。下のビレイを解いてザイルを延ばしてもらおう。やっこのことで岩壁の上に出、ハイマツを掘り出してビレイを取る。セカンドで登って来た鳥影とトップを変わり、不安定なハイマツをさげ、二ノ沢側をトラバースきみに二〇米程登り尾根に出る。あまりにも太陽の光線が強いため、雪はやはりかくなり、ワカンの下には大きなダンゴが出来る。

リッジを過ぎ、尾根が広く急しゅんになった先に、見上げるような北稜最大の壁、第三岩壁が現われる。壁の基部で丁度一時四五分の交信時間となり一本。BCとはかすかながらも最初で最後の交信ができた。

北稜最大の難所、この第三岩壁は一見どう処理しているが全くわからない。岩壁を登るには時間がかかりそう

だ。従って一の沢側を巻くか、二ノ沢側を巻くかであるが、一ノ沢側の斜面はあまりにも大きく、又一気に一ノ沢に落ち込んでいる。ダケカンバが生えているとはいえずともトラバースする気にはなれない。まして、トラバースの後、尾根に取付ける保障は全くない。二ノ沢側でも条件は全く同じだ。しかし、私はこの状況を見て直感的に、二ノ沢側の岩壁と雪壁のコンタクトラインにルートを取ることに決めた。こういう難かしい場所に来たらあまり考え込まない方が、いい判断ができることが多い。

大休止の後、塚田トップで岩壁の基部をトラバース。この岩壁はルンゼを持つ程の大岩壁だ。この急斜面のルンゼをトラバースし、ルンゼの中のインゼル状を越えた小ルンゼでザイルはいっぱい。セカンドの鳥影を迎えた鳥影にはそのままこの小ルンゼを登って上部を偵察してもらうことにする。胸がつかえる程の急斜面の上には不安定な雪に苦しめられザイルは延びない。その割には雪塊がビュンビュン飛んでくる。狭いルンゼだから、落ちてくる雪塊は必ず私の頭に当る。このことは予想していたので、あらかじめヤッケのフードをかぶっておいたが、

あまりのひどさに上に向かって文句を言う。文句を言ったからといって解決するわけではないが、私の気持が少しは晴れた。小ルンゼを七米程登った所で、左の雪壁を登って見るといいう。しばらくして「行けそうだな」といいう声だし、しばらくしてザイルがぐんぐん延びる。

「いぞお！」の声と共にビレイをはずし、鳥影の所迄登ると、一難去って又一難。スノー・リッジを五米程登った所で、また又行く手には岩壁に防がれた。

正面のカーンテは取付が垂直。右の凹状は取付のハイマツにはばまれている。左は一気に二ノ沢に落ちていく。右に左に突破口を捜すことしばし。捜すとは言っても、リッジの上では行動範囲も知れたものだ。ルートは思い切って、左の二ノ沢側をとる。コンタクトラインの雪は払うと全部落ちて、地面が出て来てしまった。右の岩を利用して二米程づり上がり、やっとダケカンバの枝にかまることができた。このダケカンバと梅が背は低いからルートを選んだ最大の理由だ。ダケカンバにシュリングを巻き、カラビナを通した。お世話になったこの二本の木に別れをつけ、左側に一米トラバースし、胸がつかえる程の草付を右寄にづり上がる。やがて傾斜を増して、

完全な雪壁となる。雪も大分やわらかくなったので、大きなバケツを掘らなければならぬ。左手は常にピッケルを十分雪面に差し、バランスを保持する役目であるので、バケツを掘るのはもっぱら右手だけだ。鼻を雪面にこすりつけるようにして身体をつり上げ、そして右手でバケツを掘る。

このようにして一五米程直上しながら尾根上に出られた。島影によると、このピッチに一時間かかったそうだが、こんな時は登っている本人よりも確保している方がつらいものだ。島影を確保していると、下に見える小冷尾根をルート仕事を終えた小川が帰るのが見えた。コールを飛ばすと「トランシーバーはどうした。」という。思わず「持っているよ。」と答えた。ハッと時計を見ると交信時間は五分過ぎていた。島影を迎えるとすでに二時近

5。  
第三岩壁の頂上より、四番目の岩壁をナイフ・リッジ四〇米がつないでいる。その先はどうなっているか見当がつかない。ナイフ・リッジの中間程が若干巾が広くなっている。ここでビヴァークする事に決定。  
ビヴァークサイトをピッケルと手で一米掘り下げ、ツェ

☆一月一日(水) 晴れのち曇り 第四岩峰―爺ヶ岳―BC

昨夜悪かった空模様も、今朝は回復して満天の星空だ。今日は第四岩壁の登攀から始まる。昨日京都が登っているので楽に登りだ。彼等の半分程の時間で登れた。京都は第四岩壁の上で、私達と同じように雪を深く掘って、ツェルトを張っていた。私達が通る頃ノコノツェルトから出て来た。

ここからは又、ラッセルが始まる。小冷尾根が北稜に接している様子がわかり、昨日渡辺と小川が張ったらしいフィックス・ザイルが見える。もう直ぐだ。小冷尾根には五人程のパーティが見え、コールを飛ばす。やがて京都も動き出し、私達のあとを追ってくる。私達に気がつかって時々腰を下ろして時間を調節している。

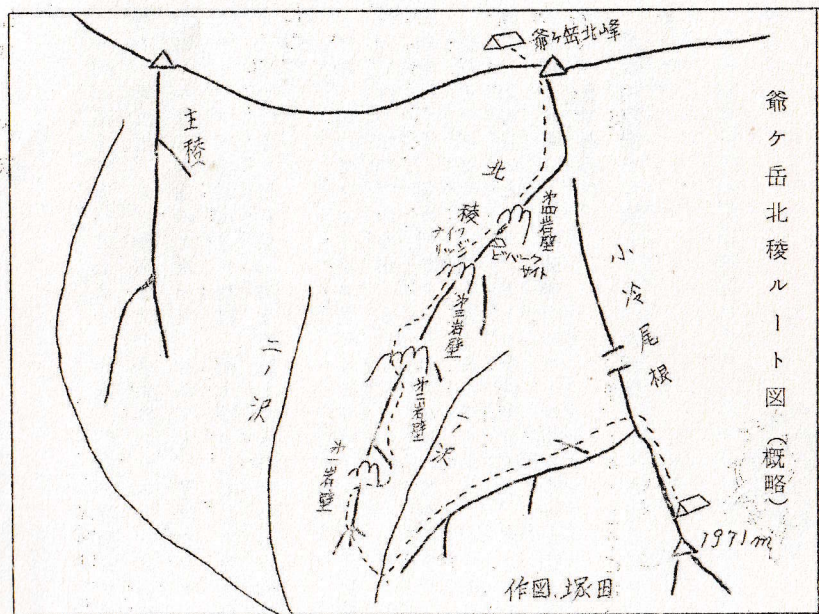
フィックスを登ると斜面はややゆるくなり、爺ヶ岳北峰に着いた。頂上で感謝の握手をした後、出口と天野の待っている天幕に向った。

(塚田 信正)  
タイム 第三岩壁上6・40―二五〇〇米附近7・40―50爺ヶ岳北峰8・40

ルトを張ろうとしたら、三人のパーティが登って来た。小冷尾根の取付きでもBCでもいつも私達の近くに天幕を張っている京都の連中だ。しかし、ここはもう彼等がビヴァークする様な場所はない。第四岩壁を登って行った。

一五時の交信ではBCからの受信は良く入るが、こちらの電波は飛ばないようだ。次に鹿島槍隊とBCの交信は手に取るように分る。鹿島槍隊は上に登った京都の連中を見つけたらしく、「北稜に二人が登ってくるのが見える。」と本隊に報告している。一七時まで一寝入りして交信したが、やはり私達の電波は飛ばない。ぐづついで来、空模様が気になったので、天気予報について聞き取ったが、これはBCと鹿島槍隊との交信で了解した。

(塚田 信正)  
タイム BC3・38―1下降点4・25―1ノ沢出合503  
1516・10―201―1800米附近7・00―551―198  
0米附近8・45―9・001―2100米附近10・00―151  
2300米附近(第三岩壁基部)11・40―12・001―第三  
岩壁上部14・00



☆一月二日(木) 曇り B C I 鹿島部落

朝食後、直ちに徹収開始。食糧の逆ボツカ分も含めて皆、結構な重量となる。登りの時よりは半分歩き良くなっている。いいピッチで初日の荷上げ地点を少し過ぎた処で一本立てる。ここから「花のA Aコンビ」?とかの二人、出口・天野が先発する。沢の音がきこえて、流れが見えて来る頃、急な斜面の足下に先行の二人が沢を渡っている姿が見えた。ここから入山日に渡った氷とノロのいやな処を飛び石伝いに渡ることになる。最終日の為にデボしてあった食糧を振り分ける一方、最初の処だけザイルを張って工作する。ここが渡り終えてからも何度か渡り返し堰堤を高巻いて雪原を横切ると大谷原へ着く。スパッツやオーバーズボンを取っている処へ出口、天野が空身で戻って来た。随分と早いので皆びっくりする。ここで昨日の青木湖の惨事を知り、足の便などを考え併せ、今夜は反省会を兼ねて鹿島館泊まりに決まった。一時から入浴してサッパリした処で三時から反省会。有意義な発言で白熱し、終った時は八時をまわっていた。

タイム B C 7・40 鹿島館12・15

(小川 憲子)

各隊の報告

☆装備

今回は荷上げを行わなかった為、装備の管理はやり易かった反面、B C 設営までの各会員のキスリングの重量は、かなりのものとなった。それでも、予定通りベイスキャンピングを設営出来た事は、荷上げをしなくても十分やって行けるだけの会の力を実証したものであると思われる。

また、初めてフィックス用に6ミリザイル二〇〇米を持って行ったのであるが、6ミリダブルはブルージックが利きにくく、急な所は9ミリの方が良いであろう。石油ポンプは寒さで使えなくなる事もあり、ジョーゴ形式の方が良いと思う。ドーコを使用せずに、ダンポールを使った事で、共同装備でビニール袋をもっと持つて行くべきであろう。

最後に装備をお貸し下さった皆様、ありがとうございます。(島影 記)



共同装備一覧

幕営用具	数量	行動用具	数量
天幕	2	9ミリザイル	6
ソエルト	3	フィックス用6ミリザイル	300m
雪スコップ	4	背負子	4
雪ブラシ	4	トランシーバー	3 → check
炊事用具		赤布	40 → 花
石油コンロ	6	旗	20 → 旗
石油タンク	20ℓ	1	1
〃	5ℓ	2	2
〃	3ℓ	3	20 → 〃-2?
石油ポンプ	2	2	2
コッヘルセット	2	1	1
テルモス	5	2	2
消耗品		薬品	1 set
石油	40ℓ	コンロ修理用具	1 set
ローソク	17	細引	20m
ロールペーパー	18	ベニヤ板	9
メタ(棒状)	100		
電池	3 set		

☆食料

今冬山合宿の食糧計画にあたり、次のような方針を立てた。

- (1) 費用は一人一日九百円以内に収まるように、内容を考える。
  - (2) B C 以下では生もの、生米による調理は可能と考え、これらを全面的にとり入れたB C 食を使用する。
  - (3) B C より上部では従来通り、ベミカンとα米中心のアタック食を使用する。
  - (4) 計画変更の時、相互乗入れ可能なようにB C 食、アタック食間に同じメニューのものを入れておく。
  - (5) 従来のドーコはやめ、ダンポールに防水用ビニール袋を使用する。
  - (6) メニュー表を各隊テントの人口にぶらさげて一覽で見るようにしておく。
- ふり返ると、以上の方針はだいたい効果的に遂行できたと考える。(1)の項は、費用を予算内に収め、かつかなりのコストダウンをする事が出来た。これに対して、反省会で特に量が少ないという意見はなかった。(2)(3)(4)の項は、従来の一本立てとちがいが、やや煩雑に欠点があっ

献立表

	A 隊 (4人)	B 隊 (3人)	C 隊 (3人)	D 隊 (7人)
2・9日				
	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )
	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )
3 0日	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>
	(S <sub>2</sub> )	(S <sub>2</sub> )	(S <sub>2</sub> )	(S <sub>2</sub> )
	(B <sub>2</sub> )	(B <sub>2</sub> )	(B <sub>2</sub> )	(B <sub>2</sub> )
3 1日	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>
	s <sub>1</sub>	s <sub>1</sub>	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )
	b <sub>1</sub>	b <sub>1</sub>	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )
1 日	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>
	s <sub>2</sub>	s <sub>2</sub>	s <sub>2</sub>	(S <sub>2</sub> )
	b <sub>2</sub>	b <sub>2</sub>	b <sub>2</sub>	(B <sub>2</sub> )
2 日	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>
	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )	(S <sub>1</sub> )
	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )	(B <sub>1</sub> )
3 日	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>
	s <sub>2</sub>	s <sub>2</sub>	s <sub>2</sub>	s <sub>2</sub>
	b <sub>2</sub>	b <sub>2</sub>	b <sub>2</sub>	b <sub>2</sub>
予備日	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>	L <sub>2</sub>
	s <sub>1</sub>	s <sub>1</sub>	s <sub>1</sub>	s <sub>1</sub>
	b <sub>1</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>1</sub>
予備日	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>	L <sub>1</sub>

1. BC食 (B<sub>1</sub>) (B<sub>2</sub>) (S<sub>1</sub>) (S<sub>2</sub>) 取付—BC間で使う。
2. アタック食 b<sub>1</sub> b<sub>2</sub> s<sub>1</sub> s<sub>2</sub> BC上一鹿島檜間で使う。
3. 予備日はアタック食と同じ物を使う。

だが、冬山に生ものを使うのは今食糧係の大きな目的の一つであった。今後とも、冬でも可能な範囲で生ものを調理するという一つの考え方を忘れないでおきたい。(5)の項は効果的であった。反省会でも、自由バックしゃすい等、好評であった。(6)の項は残念ながら徹底されていなかった。これを見れば全てわかるように配慮していたわけで、もっと有効に活用してほしかった。

その他、反省会で出された意見として、  
表示方法をもっとわかりやすいシンプルな方法にしてほしいという意見と、記号化は長期計画にそったものであり、それに対する認識が足りないという二つの対立する意見。

パーテイ編成、人数が変わった場合の方法としては、今後BCでの集中管理の方法がある。

献立に対して個人の嗜好を強く出すのはまずい。長期計画ではパン食やメン類の食事はできるように練習しておくかねばまずい。普段より食べられるように練習しておく事。今の献立内容はせいとであり、レクレーション的色彩が強い。入山前に食いだめしておき、山行中はビタミン剤、塩等最少限で超軽量化し、行動を拡大するという

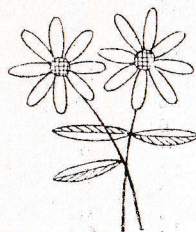
考え方もある。

等が出された

食糧計画は固定されたものではなく、時間と共に進歩していくべきものである。考え方によれば非常におもしろい分野であり、今後とも皆で、さらに新しいアイデアをとり入れていきたいものである。

最後に、食糧準備にあたり、皆さんにいろいろ御協力いただきました。又、食料のさし入れ有効に使わせていただきました。感謝いたします。

(藤井 甲山 永井)



(明細)

L<sub>1</sub> : カルケット・月餅・スティックソーセージ・干ダラ・あめ・チョコレート・ミカン  
L<sub>2</sub> : 食パン(バターサンド)・ロシヤケーキ・チョコレート・チーズ・塩コンブ・にぼし・ミカン

B<sub>1</sub> : [雑煮] もち・豚肉・玉ネギ・カマボコ・干シイタケ・しょうゆ・マーガリン・たくあん

B<sub>2</sub> : [雑炊] 米・玉ネギ・人参・豚肉・しょうゆ・マーガリン・つけもの

b<sub>1</sub> : [カウドン] インスタントウドン・もち・つけもの・ベミカンb

b<sub>2</sub> : [雑炊] α米・つけもの・しょうゆ・ベミカンb

S<sub>1</sub> : [野菜イタメ] 米・豚肉・玉ネギ・人参・キャベツ・マーガリン・しょうゆ・たくあん

S<sub>2</sub> : [豚汁] 米・玉ネギ・ジャガイモ・ゴボウ・人参・みそ・つけもの

s<sub>1</sub> : [カレー] α米・カレーウ・つけもの・ベミカンs<sub>1</sub>

s<sub>2</sub> : [豚汁] α米・つけもの・ベミカンs<sub>2</sub>

調味料

みそ・しょうゆ・ドライしょうゆ・塩・こしょう・マーガリン・砂糖・コンソメ  
紅茶・緑茶・コーヒー・レモン・ウイスキー・お茶漬の素・生ニンニク

テント食

プリン・インスタントおしるこ・お好み焼

予備食

SB: オートミール・塩コンブ・マーガリン・つけもの

SL: L<sub>2</sub> と同じ

SS: α米・インスタントみそ汁・つけもの

ベミカン内容

b : 玉ネギ・人参・豚肉・ラード

s<sub>1</sub> : 玉ネギ・ジャガイモ・人参・豚肉・ラード

s<sub>2</sub> : 玉ネギ・ジャガイモ・ゴボウ・人参・みそ・豚肉・ピーマン

特別アタック食(北後隊ビバーク用)

ハム(中) (1本)・ドライフルーツ(4袋)・月餅(4個)・カレーウドン(2袋)  
クリームスープ(1袋)・干ダラ・キャンロップ・紅茶

☆医療

通常通りBCに急求箱を備え持病薬は本人持参とした。  
医療係など準備だけで、現地では取り立ててする事もな  
いのが通例となっていたが、今回は石油のただれ2例、  
風邪2例、凍傷1例、胃炎1例と賑やかである。

◎石油の二〇とポリタンを荷上げ中、口もとから石油が  
もれて背中、腰にしみ、その夜ひぶくれ状態、その次の  
日は、赤むけの見るも無惨な姿となった。ひぶくれの時  
は、エタノールで拭いて石油分をとり、メントムをつけ  
次の日はワセリン入りの軟こうをつけ、三角巾とバンソ  
ウコウで固定した。手当はしてもなおった訳ではないか  
ら、二人ともザックがすれて辛かったに違いない。

あまり例はないけれども、燃料としての石油は必需品だ  
けに取扱いは十分注意して、未然に防げる事故は起こ  
してはならない。

◎入山前にひいていた風邪がこじれ、症状がすすんで発  
熱・嘔吐をともなっていたので結局下山することになっ  
た。山では肺炎を併発しやすいので適当な処置とと思う。  
薬はハイベンザ、下熱にバイエルアスピリン、疲労回復  
にベリックス錠を使用。

◎その他の凍傷は実際に見てはいたので解らない。  
濡れた靴下をそのままはいたらしいが、胃炎と共にた  
したことはないと思う。凍傷はなつてからさわいでも手  
遅れなのだから各々注意すること、日頃の心掛けと、  
あとは血行促進剤なども効果があるかもしれない。

(小川 憲子)

会 計 報 告

収入	合 宿 費	208,000 (13,000 × 16)
	寄 付	2,500 <sup>12,000</sup>
		210,500
支出	食 糧 費	81,492 (1人1食243円)
	装 備 費	12,813
	交 通 費	43,150
	保 険 料	18,400 (1,150 × 16)
	宿 泊 代	32,200 (2,300 × 14)
	土 産 代	3,650
	絵ハガキ・切手	430
	返 却 金	18,200
	寄 付	165 (ヒュッテ会計)

( 桐 田 )



☆反省会記録 一月二日(休) 於 鹿島部落鹿島館

◎計画について：爺ヶ岳小冷尾根、北稜という山域で行なったことについては、妥当な線であろうとの意見が大部分。縦走をとりやめたことはやむを得ないだろう等の意見があった。

◎行動について：交通関係では、大町駅よりのマイクロバスは手配が遅かった為、使用できなかった。指定券の手配等を個人に頼り過ぎる。↓合宿に庶務係を設け、事前の手配が必要。

荷上げのローテーションは良かった。北稜は三人の方が良かった。計画にも関連するが、北稜隊のビバーク体制は十分でなかった。小冷尾根上部はもっとキスリングでの通過を考えた工作をしてほしかった。ルート工作隊を決めておきたかった。関連↓サポート隊の性格が明確でなかった。6ミリ、ダブルのフィックスは使いにくい。↓9×11ミリのシングルが使い良い。↓フィックス工作のしかたを研究しておきたい。鹿島槍隊の幕営地は北峰頂上と、はっきり決めるべきであった。一月二日に下山したことにについては妥当であった。本隊がフィックス直下までで終ったことについて↓個々人の力量が把握でき

ず、やむを得なかった。鹿島槍アタック時の出発が遅い。下山時の先発は早い方が良い。帰りの交通等確認しておくべきである。などの意見。

◎装備について：6ミリのフィックスは止めるべきである。フィックスに個装を使ったのはまずい。↓会装備でそろえたい。鹿島槍アタック用のザイルが上っていないか。石油の容器が手配されていなかった。ビニール袋が足りなかった。コンロの使い方に慣れて欲しい。サメが欲しかった。石油ポンプが二つとも使えなくなってしまう。登攀的行動が有る場合は、そのメンバーが装備食糧を計画すべきである。↓メンバーの変動があった場合、困る。装備の分担をスムーズに行なって欲しい。などの意見があった。

◎食糧について：献立表の記号化については、分りにくいという意見と日程の変更などの場合、やりやすい等の意見が出た。↓シンブルな方法が良い。質、量共に良過ぎる。ダンボール箱は使い良い。荷揚げはその都度、必要性を考慮して行なった方が良い。合宿に参加しない人へ手伝ってもらえたのは良かった。その他、多くの意見が出たが、今後も色々改良する点があるようだ。

◎総括：当初の目的は、おおむね達成されたが、これを一つのステップとして、さらに次へ全体のレベルアップを計っていきたいと云うのが、反省会のもどめであると見えより。

(小塚)

感想

北稜を登攀して 島影 修二

爺ヶ岳北稜は長さ一五〇〇米、標高差一〇〇〇米、奥多摩で言えば鷹ノ巣山の稲村尾根を少し急に上ったくらい

の尾根である。今回は天候に恵まれた為、思っていたより、かなり楽に登ることが出来た。取り付くまでは雪崩が一番気になっていたのであるが、雪がしまっていた為、日中に気温が上昇して、アイゼンに雪がついて歩きにくくなって、ほとんど雪崩れなかった。一度だけ、岩峰をまいて登っていて、その基部でトップを確保している時に、すぐそばのルンゼから、小規模な表層雪崩が起きて、トレールが消えただけであった。

むずかしかった事と言えば、雪後上でのルートの取り方、特に岩峰のまき方と、最後の岩峰の登りであったが、

これもリーダーの適確な判断で難なく通過出来た。

初めての雪稜上でのビバークも、天候が良かった事と陽のたかいうちにビバークの準備を始めた事、装備が十分であった事などから、快適に過すことが出来た。

今回の登攀で、今までに経験したことのない色々な事を体験することが出来た。今後、より困難な山へ向う為には、こういったルートをより多くの人が登る事が必要であると思う。

荒天下でのザイルワーク、吹雪の中での雪稜でのルートの取り方、ビバークの為の装備等、経験しなければならぬ事が数多くある。これからも登れる限り登って行きたい。

冬山合宿に参加して 齋藤 重幸

はじめの冬山に、合宿の一員として参加できたことはたいへんうれしく思っております。又何も知らない僕が全日程、事故もなく無事下山出来たことは、良き先輩のおかげであり、感謝いたします。

今回の冬山合宿の場合、諸先輩は口々に「冬山とは思えないより天気だ」と、言っているように、たしかに天気には恵まれていたと思います。僕の場合、冬山の福

験と言うと、雪上トレーニングに一回と、ラッセルトレーニング一回と、全く知らないと同じようなものである。このような未熟な僕が、冬山に参加できたことは、天気の良い時もありますが、たいへんよろこぶべきことだと思えます。しかし、爺ヶ岳山頂を目前にして、山頂に立ってなかった時のくやしさは、参加できたよろこび以上に山に未熟な自分に対する怒りを感じました。雪の結晶が印象的でした。

後記

CL 渡辺 完治

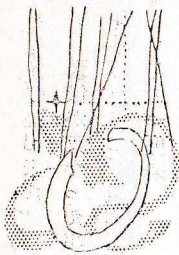
今合宿の目標を、フィックスザイルを必要とするルートを重ねて通過(上下降)し、主稜線上に幕営する。初歩的バリエーションルートの登攀の二点に絞って計画した。幸い天候にめぐまれ、ほぼ目的通りの事が行い事が出来た。

小冷尾根にフィックスザイルをセットし、北稜線のサポートを兼ねて、国境稜線上天幕を上げるのを第一目標にした。サブザックのみの通過はあまり意味が無いように思える。ルート工作の方法、荷上げの苦勞は今後、剣・穂高の冬山、あるいは海外の山々に目標を置くならば、

この体験は必ず生かされるであろう。

北稜については、OMCの冬山合宿として始めてのバリエーションルートであり、それなりに意義はあったと思う。ただメンバーの人選が二転、三転してしまい、参加者にめいわくをかけてしまった。これは北稜程度のルートならば、登れる人材が豊富にそろっているという、せいたくをなやみであった。会の実力を裏がえしているといえよう。

最後になつたが、不参加ながら合宿に際し、種々協力して下さった方々には、いつもながら感謝しています。君達の協力なしでは、大きな山行になれなくなる程、なかなか困難である。反省会に出口さんが言っていたように「山岳会でなければ出来ない山行」を今後もしっかりとしたい。



1649 冬の沢歩き教室(坊主谷)

期日 一月十五日(水) 晴

参加者 塚田CL 菅沼SL 渡辺 秋葉 秋元 永井

中村 以上七名

報告

前夜ヒュッテに泊り、峰谷部落まで塚田と渡辺の車に分乗して入った。出合までの林道には雪は全くなく、沢に入っても同じである。F-1は氷が着いているという感じで登るなど論外であった。登れる程度に氷った滝もあったが昨年とは大違いである。三段の滝も大きなたららが下がっているという感じ。ここまでで中止とし右側の斜面を直上して登山道に出て峰谷部落に下り解散。寒波が続いていた後で、昨年の例もあり今年も期待していたのだが残念だった。(中村 幹彦)

タイム 8・35坊主谷出合ー14・55峰谷部落

会務日誌

☆山話会 一月二七日(水) 国立公民館

出席者 出口(鶴) 小川(正徳) 渡辺 塚田 秋葉 富士野

島影 齋藤(圓) 永井 福島 以上十一名

二各係の報告 委員会報告 山行報告 山行計画

○国鉄ストのため、参加者が少なかつた。

☆山話会 一月二九日(水) 国立公民館

出席者 中野(純) 鈴木(博) 出口(鶴) 渡辺 小川(正徳) 菅

沼 南雲 富士野 小堤 島影 秋元 藤井

齋藤(圓) 天野 永井 紺谷 高橋 福島 以上

一九名

二委員会報告 各係の報告 山行報告 山行計画

二スライド(那須、八ヶ岳)を行なう

二新年度入会希望者に対する説明会を行なった。

☆事業部会 二月四日(火) 立川「道」

出席者 富士野 石川 小堤 以上三名

二来年度事業計画案を検討した。伸びようと欲する会員を受け止められるしっかりした体制を作ること。海外遣